

氏 名	いしかわ ゆういち 石 川 祐 一
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5 0 9 号
学位授与の日付	平成 20 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 3 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	近代日本における民家の評価に関する研究
審 査 委 員	(主査)教授 石田潤一郎 教授 中川 理 教授 伊藤 徹

論文内容の要旨

本論文は近代日本における民家の評価の変遷を解明し、民家意匠の建築作品への援用を考察するものであり、大きく第 部と第 部とに分かれる。

第 部は民藝運動を対象とする。第 1 章においては、柳宗悦の建築作品と建築に関する言説を分析し、その特質を考察した。柳は各時代、各地域の造形を等価に扱おうとしたが、そうした相対主義的な芸術観を反映して、その作品は日本の庶民住宅と武家住宅に加え、中国・朝鮮、西洋の建築造形が混淆する極めてハイブリッドな意匠となっていることを示した。また工芸と美術を一体のものたらしめようとする彼の理念は建築においては、室内の家具調度と建築空間の一体化を図る試みとして現れることを述べた。

第 2 章では、河井寛次郎の建築分野における活動の全容を解明し、その特質を考察した。河井は、建築作品において、建築の地域性に配慮をしながらも、各地の民家や朝鮮の意匠を採用し、独自の民家風建築作品を残した。後年、その造形は表層的な装飾手法として流布しがちであったが、河井自身がそうした意匠に賛意を示したのは彼自身の造形理念と対応することを論証した。

第 3 章では、第 1 章及び第 2 章における考察に加えて、その他の民藝運動の作家による建築作品も含め、民藝運動の建築的成果の全体像について考察した。第二世代において活発な建築活動を行なった一人である上田恒次の建築作品では、意匠の意図的な混淆が排除されて、民家の典型的意匠へ純化していくことを明らかにした。

第 部では建築界を対象として論じる。第 1 章では、民家評価の先駆的存在として西村伊作を採り上げ、その言説を精査して民家に価値を発見する建築観の構造を分析し、さらに実作の様態を解明した。

第 2 章では、職業的建築家の中ではもっとも熱意を持って民家を称揚した本間乙彦について、その民家に関する言説を分析し、建築作品にどのように反映されているのかを明らかにした。彼は、民家の美が、構造の直截な表現と流動的な空間構成から生まれると考えた。その評価軸は、1930 年代後半以降に顕著となる、民家をモダニズムによって再解釈する意識の萌芽と位置づけることができる。

第 3 章では、1920 年代及び 30 年代における民家意匠を援用した建築作品を総合的に概観し、民家評価の多様さと時間的な遷移を明確にした。

1920年代以降、建築家の主体的な設計行為として、民家風意匠を援用する試みが確認されるようになる。これらの試みを、設計に際しての民家に対する立脚点の差異から、次のように分類することができる。第一に、今和次郎や本間乙彦に代表される、民家事例の採集からスタートして具体的な民家を継承しようとする先駆的一群が見いだせる。第二に、民家の意匠をイメージとして捉え、援用した建築家たちをあげることができる。長谷部鋭吉や笹川愼一らの作品に見られるように、西洋と日本とを折衷して、理念化された「民家」のイメージを重層化する発想を抽出できる。第三に、民家を要素に分解して捉える建築家たちが出現する。1930年代後半には、モダニストの建築家たちが民家の意匠に着目し、作品に援用した。山口文象自邸や前川國男自邸などに見られるように、彼らは屋根や障子といった部分を記号化し、本来の文脈から切り離して再解釈する。

以上のように、1910年代から1940年代までの期間において、民家意匠を援用した建築作品群の諸相と特質を、建築家によらない作品群をも含めて明らかにした労作であり、従来の洋風建築中心の近代建築史からは見えてこない多くの新しい知見をもたらした。

論文審査の結果の要旨

近代日本の建築の歩みにおいては、欧米の建築文化の受容とともに、日本の建築的伝統の継承も大きな課題であった。そのうち寺社建築や茶室建築に対する評価の様相については研究が進んできた。しかし、庶民住宅、いわゆる民家がどのように評価され、その造形がどう継承されていたかについては、概括的な把握か、個別事例の紹介にとどまっている。本研究はこの問題に正面から取り組んだ意欲的な論文である。

本論文の成果のなかで特に重要な点は3点挙げられる。第1に、民藝運動の民家評価のあり方を精査したことである。民藝運動のメンバーは、建築界よりも早く、民家の価値を称揚し、実作に展開した。しかし、これまで建築史学からはアマチュアの余技として必ずしも重視されておらず、その事実だけが言及されるだけであった。本論文は、彼らの言説を綿密に分類整理して、民藝運動の芸術観の中にその民家評価を位置づけた。実作についても、資料の渉猟と遺構の調査によって、その全容を明らかにした。その上で、作品に示される特徴が民藝同人の建築観・芸術観を反映するものであることを論証した。

第2に、西村伊作の民家評価の意義を明確にしたことが挙げられる。西村伊作は文化学院創設者であるとともに、洋風小住宅の設計者として建築界にも知られているが、民家評価と実作への応用における先覚者でもあった。西村の著作を徹底的に読み込んで、多岐にわたる論点を整理し、民家「発見」の論理を抽出した。特に洋の東西を問わない「民家的なるもの」の価値を信頼して、折衷的な意匠にも踏み込んでいった事実の指摘は、民俗学的な関心からの民家評価と次元を異にする建築的価値の存在を教えるものとして注目される。

第3に、職業的建築家としてもっとも熱心に民家の魅力を紹介し、実作に展開した本間乙彦の業績を明らかにしたことが挙げられる。本間は、地域的な特色を強調して民家の地方性の表出を図った作品がある一方で、モダニズム的な民家評価の萌芽が現れることを指摘して、1930年代後半以降の民家理解の類型が共存していたことを明らかにした。

民家の価値が発見され、実作に展開していく過程は、一見単純であるが、そこにはアーツ・ア

ンド・クラフツ運動的なヴァナキュラリズムから，記号化された造形モチーフの操作に至るまでのさまざまな建築観が存在することを明らかにした労作であり，近代建築史に裨益するところまことに大きい。

なお，本論文の内容の一部は，申請者による下記の学術学会誌の査読論文3編として公表されている。

石川祐一「河井寛次郎の建築意匠 - 民芸運動による建築的成果 - 」『デザイン理論』（意匠学会誌）第46号（2005年5月），pp. 5～19

石川祐一「西村伊作の建築観における民家評価について」『民俗建築』（日本民俗建築学会誌）第131号（2007年5月）pp. 7～17

石川祐一「柳宗悦における建築デザイン」『デザイン理論』（意匠学会誌）第51号（2007年11月）pp. 3～16